

〈論文〉

道徳の自然学的基礎づけの嚆矢としてのメランヒトン

菱刈 晃夫

キーワード：心（靈魂）、心理学、人間学、ゴクレニウス、スネリウス、カスマン

はじめに

今日の倫理学の潮流の一つとして道徳を人間の自然本性、すなわち人間という生き物の生物学的基盤、つまり物理的自然身体そのものの中に基礎づけようとする試みが盛んである。こうした道徳に対する自然主義的アプローチにとっての第一の問いとは、人間の心は本来的にどのような特徴や構造を備えたものとして理解されるべきか、私たちの心には何がどのくらい生得的に与えられているのか、という心の基本設計をめぐるものである⁽¹⁾。こうした倫理学の自然主義的試みに先立つ嚆矢として、これまで考察を重ねてきたメランヒトンがあげられよう⁽²⁾。すでに初期近代において彼は、「心」あるいは靈魂（anima）を人間の物理的身体に根ざすものとして捉え、その機能や可能性を果敢に解明しようとしていたからである⁽³⁾。

メランヒトンは当時の解剖学的知見も多く取り入れながら、心の基盤としてのミクロコスモスたる身体に多大な関心を示している。それは医学への貢献となってあらわれた。また人間の身体およびこの世界を包括するマクロコスモスたる天体にも多大な関心を示している。それは天文学や占星学や地理学等への貢献となってあらわれた。総じて自然哲学（自然学）の分野においてメランヒトンはさまざまな業績を残し、それらは後代にも少なからぬ影響を及ぼすことになる⁽⁴⁾。とりわけ心や靈魂に関する研究は、やがて「心理学」（*psychologia*）と名づけられ、「人間学」（*anthropologia*）へと発展していく。ただし、それらはあくまでもルター神学や信仰に基づくキリスト教的な科学（*scientia*）であることを忘れてはならない。

以下、メランヒトンにおける道徳哲学と自然哲学との関連について明らかにしたうえで、心理学や人間学への展開の過程について素描することを通じて、今後の課題を明確にしておきたい。

1 節 道徳と自然

まず、既述したようにメランヒトン思想の全体構造の中で、自然哲学（自然学）と道徳哲学（倫理学）は両翼となっており、密接にリンクしている⁽⁵⁾。『自然学入門』（*Initia doctrinae physicae*, 1549）に含まれる「人間の目的について」（*DE fine hominis*）では、こう記されていた。

さて、このように自然学は研究者を、医学という学問ばかりでなく倫理学へも送り出す〔開く〕ことになる。というのも医者は人間の身体の四肢や部分、性質の多様性や作用〔結果〕、身体の多様性について、もっと多くのことを明らかにするからである。次いで病気の原因を明らかにし、治療〔薬〕を与え〔付加し〕、植物、動物、鉱物、宝石を探究する。

倫理学は、さらに自然学から魂の段階、行為の矛盾、知識、愛情、さまざまな情念〔に関する知見〕を手に入れた後に、この教え〔学問〕から人間の目的について、すべての行動を導く自然法について〔知識を〕積み上げてゆく。それゆえ、もし私たちが倫理学を重んずるなら、医者が捉えた甘美なる自然の認識と、自然学の中に伝えられているこの始まりを認識することは必要不可欠である⁽⁶⁾。

要するに自然学は倫理学の土台となっており、道徳は自然学や医学からの学知を必要不可欠とする。現代的な表現をすれば、科学と哲学は相互に乗り入れる形となっており、決して対立しあうものではない。

さらに『倫理学概要』(Epitome ethices, 1532)では人間の目的について、こう述べられる。

原因が探し当てられたとき事柄はついに解明されるのであるから、今度はどのようなことについても、その目的が探究されなければならない。したがって聡明かつ学識ある人々は人間の目的について探究する。特に哲学の他の部分は別の原因について語るが、道徳哲学は人間の目的の探究に全力で取り組む。このようにして自由な認識がもたらされることになる。というのも人間が自らの自然本性の目的について理解することは、もっとも価値あることだから。アリストテレスが初めて幸福が人間の目的であると定義し、あるいは幸福という言葉を用いてこれに〔初めて〕答えた。私たちは彼の定義に従って主張しよう。理性は徳の行い〔徳ある振る舞い〕が人間の目的であることを示している。つまり理性は徳の行いが善のすべてであると判断するのである。そして、それはそれ自体が持つ価値のゆえに追求されるべきすべてである、と理解される。多くの者は徳が人間の自然本性の中に記されていて、人間はとりわけ徳に向けてつくられており、人間の自然本性は徳に向かって呼び寄せられているなどという。私は先に哲学は神の法の一部であると述べた。ここから人間の目的について判断することができるであろう。まさに神の法は人間の目的が理性によって理解される限りでの法に従うことにある、と述べるのである⁽⁷⁾。

自然学は人間の自然本性にある心すなわち靈魂とは何であるかを明らかにし、自然法を浮き彫りにする。倫理学は人間の自然本性に徳が記されていて、それは理性によって理解される限りでの神の法、つまり自然法に従うこととする。1548年の『道徳哲学概要』(Epitome philosophiae moralis)では道徳哲学とは何かという問いに、こう端的に答えている。

それは自然法の説明であり、理性が判断できる限りで、通常の学問における秩序によって集められた記述である。その推論〔による結論〕は徳の定義であり、あるいはすべての人間における規律を導くことに関する教えであり、外的な規律について公言する限りでは、十戒と一致する⁽⁸⁾。

こうした見方に基づいてメランヒトンは自身の倫理思想を展開したのであった。『弁証法の問題』(Erotemata dialectices, 1547)では道徳哲学と自然哲学との関係について、こう述べている。

道徳哲学は自然学から次の見解を採り入れる。人間の自然本性はある〔確かな〕目的のためにつくられている。それは自然学の中で明らかにされているが、道徳哲学の中では断言されない。しかし、それは仮説として受け入れられる。つまり、道徳哲学の始まりとして、他のところから採り入れられた確固たる見解である⁽⁹⁾。

本来の罪なき人間のままであったなら、まるで $2 \times 4 = 8$ が明白であるように、「盗むなかれ」といった道徳的教えも万人に何の抵抗もなく受け入れられ、難なくこうした自然法に従うはずであった。しかし現在の暗闇の中で(in hac caligine) 神的な光はますます暗くなると共に、腐敗した〔歪んで墮落した〕情念は実践的な事柄の中で、こうした自然法への賛同をますます弱体化させている⁽¹⁰⁾、とメランヒトン言う。

ともかくメランヒトンにとって人間を含むこの世界や宇宙全体は、神によって創造され、しかも人間の精神に宿る知性や理性は、この神の創造物の飽くなき解明へと駆り立てられている。

すべての自然の事物は人間の知力にとっていわば劇場〔舞台〕のようなものである。神はこれら〔自然の事物〕が注視されることを望んでいる。それゆえに神は人間の精神に、これを考察しようとする熱望と、その認識に伴う喜びを与えたのである。この〔自然の事物の〕原因は健康な知力を自然の熟考へと誘う。たとえ何ら有用性が伴わなくても、見るのが〔人を〕楽しませるように、精神はその自然本性によって事物を注視することへと駆り立てられる。したがって、これ〔精神〕はこうした研究の原因となり得る。というのも自然を考察することは、その〔精神の〕自然本性に最大限に即応し

ているからであり、精神が自ら進んで考察することは、たとえ何ら他の有用性が伴わなくても、もっとも快い喜びをもたらすからである⁽¹¹⁾。

人間の心や靈魂の住処としての身体もまた、メランヒトンによればこうした自然の事物の一部分である。それは神による創造物であり、これの自然学的すなわち解剖学的、さらに医学的な解明は、神による創造の目的の究明と同時に、人間本性の目的の究明にも繋がる。人間を含めたこの世界では今でも神の摂理が支配し、なおかつ神の創造の痕跡 (vestigia) は至る所に満ちている。そうしたキリスト教信仰に基づいて、メランヒトンは倫理学や自然学にも取り組み続けたのであった。とりわけ人間の心および靈魂の解明への傾注に関しては、人間社会における道徳や倫理の役割を極めて強調せざるをえない、当時の抜き差しならない時代状況も反映されていることを看過してはならない⁽¹²⁾。またメランヒトンを心の医学的解明へと強く促す背後には、こうした神の摂理や創造の痕跡を究明するという、敬虔なキリスト教信仰があったことも忘れてはならない⁽¹³⁾。

2 節 心理学, 人間学への発展

次に、それがやがて心理学や人間学へと発展していく系譜のみ簡単に確認し、後の課題へと繋げたい。

メランヒトン以降、心への関心がますます高まり、De anima をテーマにしたパンフレットも盛んに印刷流布された⁽¹⁴⁾。それは「汝自身を知れ」の標語を掲げていた。シューリングによる 16 世紀における心つまり靈魂に関する文献一覧を資料としながら以下、楠川によると⁽¹⁵⁾、まずメランヒトンの流れをくむ者として彼の学生でもあったストリゲリウス (Victorinus Strigelius, 1524-1569)、その同僚であるステイゲリウス (Johannes Stigelius, 1515-1562) があげられている。彼らは共にメランヒトンによる De anima の注解を残している⁽¹⁶⁾。

次に 16 世紀終わりになってゴクレニウス (Rudolph Goclenius d. Ä, 1547-1628) が、いよいよ今日では心理学と訳される ψυχολογία すなわち psychologia というタームを、マールブルクで 1590 年に出版される自身の編著のタイトルとして用い始める⁽¹⁷⁾。この複数の著者からなる論考を集めたサイコロギアの初版には、メランヒトンの娘婿でもあるポイツァー (Caspar Peucer, 1525-1602) によるもの (De essential, natura et ortu animae hominis) も含まれている。なおゴクレニウス以前にも、すでにフライギウス (Johann Thomas Freigius, 1543-1583) が 1574 年の著作の中でサイコロギアというタームを用いているが、著書の題目としてあらわれたのは、ゴクレニウスのものが最初と言われる⁽¹⁸⁾。

これは同じくマールブルクにいたスネリウス (Rudolph Snellius, 1546-1613) の関心を引き、1596 年に注解 (In aureum Philippi Melanthonis de anima labellum commentationes) が著される。彼は当時イタリアの解剖学者コロンボ (Realdo Colombo, ca. 1515 – 1559) の発見にもよりつつ、それは紛れもなく心理学の一部であり、人間の身体と魂の両方を扱う学問であると説明する⁽¹⁹⁾。そしてスネリウスは、墮罪後の人間においてどの部分をもっとも破損しているかという問題に関して、むしろ身体よりも靈魂や心、とりわけ知性よりも意志がダメージを受けていると言う⁽²⁰⁾。またサイデル (Bruno Seidel, ca.1530-1591) も、人間の心身が共に神による素晴らしい創造物であることを明言している⁽²¹⁾。

そしてゴクレニウスの下で学んだカスマン (Otho Casmann, 1562-1607) は既述したように⁽²²⁾、「心理学」に「人間学」をプラスして 1594 年、『人間学的心理学、または人間の魂に関する学説』(Psychologia anthropologica, sive animae humanae doctrina) を出版する。これよりアントロポロギアすなわち人間学というタームも、いよいよ頻繁に用いられるようになる。またマギルス (Johannes Magirus, 1524-1596) も 1603 年の著書で、人間学という用語を採用している⁽²³⁾。

おわりに

以上、メラニヒトンにおける道徳と自然、もしくは倫理学(道徳哲学)と自然学(自然哲学)との関連、そして主にメラニヒトンの *De anima* を発端として、それがサイコロギアやアントロポギアへと発展していく道筋について、ごく簡単に確認した。中でもスネリウスが、神の創造物としての人間の心身を区別しつつも一体と捉える中で、当時の解剖学的かつ医学的な最新の知見を積極的に取り入れながら、墮罪後の人間のもっとも腐敗している部分を医学的に明らかにし、それを治療するといった「科学的」態度は、一人の人間の生の全体を救いに向けての、いわば医学的な治療の過程と見なすメラニヒトンとも通底していて興味深い。あくまでもルター神学によるキリスト教信仰に基づくメラニヒトンは、魂の不死を疑うことは決してなかったが、しかし、この世における霊魂や心の住処としての身体については、これもまた神による創造物であり、かつまた神の摂理に含まれた見事な作品であるとして、その機能や仕組に感嘆し、これの解剖学のおよび医学的な探究に並々ならぬ関心を示したのであった。が、それは墮罪後、病人である人類を少しでも、いかに治療あるいは治癒していけるのか、という救済をめぐる神学的な根本テーマを起源としていたともいえよう。というのもメラニヒトンの思想構造の中心には、常に神学が位置しているからである⁽²⁴⁾。無論、それはまた彼の教育思想とも連動していた。

いわば人類の救いに向けた治療、改善、そして教育について、メラニヒトンが自然学にもよりながら、どのような思想を具体的に展開していったのか。しかも、それが後世の心理学や人間学、そして教育学にいかなる影響をもたらしていったのか。これらの詳細かつ丁寧な思想史的解明が、今後に残された課題となる。

注

- (1) 植原亮『自然主義入門—知識・道徳・人間性をめぐる現代哲学ツアー—』勁草書房、2017年、13頁、参照。
- (2) 拙著『メラニヒトンの人間学と教育思想—研究と翻訳—』成文堂、2018年、など他にもこれ以降の一連の拙論を参照。
- (3) 拙著『近代教育思想の源流—スピリチュアリティと教育—』成文堂、2005年、185-200頁、拙著前掲『メラニヒトンの人間学と教育思想』、57-67頁、313-403頁、参照。
- (4) Cf. Kusakawa Sachiko : *The Transformation of Natural Philosophy. The Case of Philip Melanchthon*. Cambridge 1995.
- (5) 拙著前掲『メラニヒトンの人間学と教育思想』、18頁以下、参照。
- (6) CR 13, 197. 同前書、43頁、参照。
- (7) 同前書、174-175頁、参照。
- (8) 国士館大学大学院人文科学研究科編『国士館人文科学論集』創刊号、2020年、82頁、参照。
- (9) CR 13, 650.
- (10) Ibid.
- (11) CR 13, 189. 拙著前掲『メラニヒトンの人間学と教育思想』、40-41頁、参照。
- (12) Cf. Kusakawa, op.cit., p.75ff.
- (13) Cf. Kusakawa Sachiko : *The Natural Philosophy of Melanchthon and His Followers*. In: *Sciences et religions. De Copernic à Galilée (1540-1610) Actes du colloque international - Rome 12-14 décembre 1996*. Rome : École Française de Rome, 1999. pp. 443-453. (Publications de l'École française de Rome, 260)
- (14) Cf. Ibid., p.450.
- (15) 以下の記述は、楠川による同前論文に多くを負っている。Cf. Schüling, Hermann : *Bibliographie der psychologischen Literatur des 16. Jahrhunderts*. Hildesheim 1967.
- (16) Cf. Ibid., S.242.
- (17) Cf. Vidal, Fernando : *The Sciences of the Soul. The Early Modern Origins of Psychology*. Chicago 2011. p.35ff.
- (18) Cf. Schüling, S.134f.
- (19) Cf. Kusakawa, op.cit. *The Natural Philosophy of Melanchthon and His Followers*, p.451. Schüling, op.cit., S.239.

- (20) Kusakawa, Ibid.
- (21) Ibid.
- (22) 拙著前掲『メランヒトンの人間学と教育思想』, 29 頁以降, 参照。
- (23) Cf. Bauer, Barbara (Hg.) : Melancthon und die Marburger Professoren (1527-1627) . Marburg 2000. S.334ff.
- (24) 拙著前掲『メランヒトンの人間学と教育思想』, 18-25 頁, 参照。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP 22K00110 の助成を受けたものです。